

月刊 新翔タイムズ

第25号 新翔タイムズ 編集室 発行・熊野新聞社

「あいさつの大切さ」

第3回県教委・井戸端トーク

第3回和歌山県教育委員会「井戸端トーク」が15日、市立光洋中学校と新翔高校で開催され、地域の人や保護者、学校関係者ら約140人が参加した。3つの分科会と共通のテーマについて話し合い、全体会で報告した。

光洋中で5限目、新翔高で6限目の授業終了後、分科会では地域とつくる元気な学校についてと「学力・体力の向上」をテーマに、熱いトークが展開された。共通キーワードは「あいさつの大切さ」。元気な学校とは生徒も先生もあいさつが当たり前で、生徒だけがではなく先生にも笑顔のある学校であることだった。

全体会で報告された意見を紹介する。

- ▽自分の意見を言える学校
- ▽弱い者を支援している学校
- ▽生徒、教師、学校が本気で話し合える学校
- ▽夢や希望を持つ学校

光洋中で5限目、新翔高で6限目の授業終了後、分科会では地域とつくる元気な学校についてと「学力・体力の向上」をテーマに、熱いトークが展開された。共通キーワードは「あいさつの大切さ」。元気な学校とは生徒も先生もあいさつが当たり前で、生徒だけがではなく先生にも笑顔のある学校であることだった。

全体会で報告された意見を紹介する。

- ▽自分の意見を言える学校
- ▽弱い者を支援している学校
- ▽生徒、教師、学校が本気で話し合える学校
- ▽夢や希望を持つ学校

「地域とつくる元気な学校」



分散会で話し合う参加者ら

光洋中で5限目、新翔高で6限目の授業終了後、分科会では地域とつくる元気な学校についてと「学力・体力の向上」をテーマに、熱いトークが展開された。共通キーワードは「あいさつの大切さ」。元気な学校とは生徒も先生もあいさつが当たり前で、生徒だけがではなく先生にも笑顔のある学校であることだった。

全体会で報告された意見を紹介する。

- ▽自分の意見を言える学校
- ▽弱い者を支援している学校
- ▽生徒、教師、学校が本気で話し合える学校
- ▽夢や希望を持つ学校

「過ちにいつ気付くか」

1学期終業式 七瀬校長が式辞



七瀬高至校長

夏休みを翌日に控えた20日、体育館で1学期の終業式があった。この日は本格的な夏の訪れを予感させる大変な暑さの中だったが、生徒たちは七瀬校長の言葉に耳を傾けた。

式辞の中で七瀬校長は「過ちを改めざる、これを過ちといふ」という言葉を用い、人生の過ちについて、今気付くのか、数年後に気付くのか、さらには気付かないまま年を重ねてしまふのかで将来が変わってくることを話した。そのために1学期で

就職が最も多い64人

進路別のアセンブリー

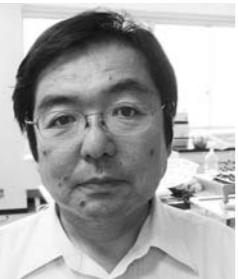
3年生132人が対象

進路指導部では、3年生132人を対象に進路別のアセンブリーを実施した。専門学校は23人、看護学校は17人、4年制と短期大学は16人、就職には最も多い64人が参加し、進路実現のために耳を傾けた。

進学希望者を対象とした専門・看護学校、4年制・短期大学では、将来就きたい職業を考えて学科を選び、その学校選びの大切さや学習方法や学習時間の確保などについて説明があった。

就職は会場となった会議室が満席になるような状況で、就職試験が始まる9月までの3カ月間の予定で就職試験、社会人になることへの心構え、求人票の見方などについて説明を受けた。

先生の紹介 ◆ 中畑康介先生(54)



新翔高校に勤めて2年目。印象は生徒が元気がいいということ。特にクラブが活発というイメージがあり

まず、朝は早めに学校に来るのですが、クラブウインドからは、朝練の生徒とても元気の良い掛け声が聞こえてきます。

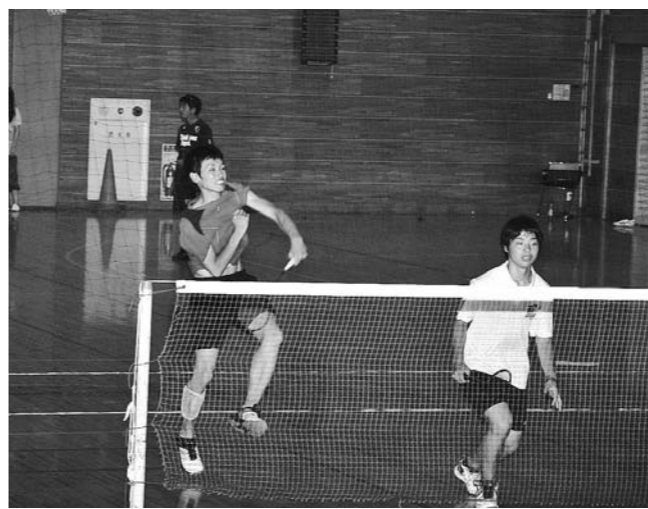
授業は理科と情報を担当しています。これからの情報社会(携帯電話、コンピュータなどの電子機器が身近な

バドミントン部

バドミントン部は3年生10人、2年生3人、1年生6人の計19人でこの6月の県総体予選まで活動した。現在は1・2年生に加え、沖縄インターハイ出場を決めた3年生2人を合わせた11人で活動している。

同部からのインターハイ出場は8年ぶり。31日にはダブルス戦、8月1日(日)にはシングルス戦があり、一

クラブ紹介



練習に熱が入るインターハイ出場の谷口大輝、三寸木巧君

いる。中学時代はバドミントンとはまったくの無縁で、高校生になってから始めた部員もいる。

バドミントンはただシャトル(羽根)をラケットで打ち返すだけでなく、あまりハードなスラック、試合形式などたくさんある。また部員一人一人が自分の目標をしっかりと立て、常に向上心と感謝の気持ちを持って取り組んでいる。コートが広く感じ、

運動量も多い。またラケットにシャトルが当たると空振りすることも最初のうちにはよくある。相手との駆け引きや、時には相手をだますショットなど、試合中は常に、次にどのようなショットをするかを考えなければいけない。バドミントンは精神面に左右され、一つのプレーがゲームの流れを変えてしまうことも度々ある。

バドミントンはすべての球技の中で打球の初速が最も速いこと有名。スマッシュの初速は、時速300〜400kmに達するといわれている。打ち出されたシャトルは急激に速度が低下するため、初速と終速の差が著しく、また打球が空気抵抗を受けやすく、少しの風でも飛距離に影響を及ぼす。そのため練習や

系列選択説明会を開催

1年生の保護者が熱心に聞き入る

16日夜、1年生の保護者を対象に、系列選択説明会を実施した。生徒の進路にかかわる大切な選択のため、参加した40人の保護者は熱心に聞き入っていた。

生徒たちは教養、地域文化、建設技術、ビジネス、情報の5系列の中から2・3年次に所属する



1年生の保護者を対象に系列選択説明会を開いた。保護者は熱心に聞き入る。

系列は二つ選択し、各専門科目を学ぶ。教養系列は教養を深めるための科目を設定し、大学、医療系専門学校、公務員などの進路に対応する。

地域文化系列はデザイン、観光、防災についての基礎知識を習得し、当地方の発展に寄与できる人材を育成する。

建設技術系列は道路、橋、トンネル、ダムなどを造るための知識や技術を習得し、ものづくりを實踐できる人材を育成する。

ビジネス系列はビジネスの基礎基本である簿記、情報処理、ワープロ、計算などの力を身につけた人材を育成する。

情報系列はコンピュータの基本的な仕組みやソフトウェアの使用法などを理解し、ビジネスに活用できる人材を育成する。

9月中旬にそれぞれの系列に設けている科目の説明会を経て、10月下旬に最終決定する。

伊都戦で惜しくも敗れる

1年生4人が先発し、今後に期待



力投する先発の藪本祥也君

硬式野球部は18日、第四試合で伊都高校と対戦した。8-3で敗れたが、



二回裏の攻撃



卒業生も加わり懸命の応援

投手の藪本祥也君以下1年生が4人先発した若いチームであり、今後に期待できる試合内容だった。

新翔は一回一死一塁、栗須貴嗣君(2年)の適時三塁打で先制し、四回にも二死満塁から安田豊君(1年)の適時打などで点差を広げた。

伊都は四回、失策と暴投で1点を返すと、走者一掃の適時三塁打を放って逆転。さらに六・八回にも2点ずつ加点した。新翔は五回以降、伊都の継投策に打線が沈黙した。

雨中の熱戦 球技大会



ミニサッカーでボールを追う男子生徒

13・14日、あいにくの雨模様だったが恒例の球技大会が開かれた。時折猛烈に降る雨にも負けず、グラウンドでは男子ミニサッカーが学年ごとのリーグ戦で開催され、全身ずぶ濡れ、泥だらけになりながら熱戦が繰り広げられた。

試合後、大雨でできた水たまりに頭から飛び込む3年生のグループも現れ、あちこちで青春の思い出作り?の光景があった。

体育館、佐野体育館では女子バレーボールの学年リーグ、学年対抗のチャンピオンズリーグが開かれた。

なお、男子サッカー3年優勝の5組と教員チームとのエキシビジョンマッチが日程終了後に行われ、2-2からPK戦の末、教員チームが勝利した。



女子バレーボールで熱戦を展開

成績は次の通り。

【男子サッカー】
①1年4組、2年4組、3年5組

【女子バレー】
▽総合優勝、2年4組A
①1年3組A、2年4組A、3年1組A